

とするヴェルヌ流の合理的な結末をつける際に『アラビアンナイト』の挿話を思い出し、利用したと推定することは外的外れではあるまい。

『アラビアンナイト』の魔術的な世界とヴェルヌの科学的イマジネーションはあまりに異質であるようであるが、ここでは見事に交叉し、重なっている。すでに述べたように、船を難破させる〈磁石山〉の伝承は、古代からヨーロッパとアラブの世界に広がっていて、例えばバートン版の『アラビアンナイト』では、船を難破させる〈磁石山〉の伝承を、プトレマイオス（プトレマイオスの『地理学』では〈磁石山〉は〈ヘラクレスの石〉とされ、鉄釘を使用した船は動けなくなるので、木釘で船を造るとある）、マンデヴィル、ラブレール、パトックなどが言及していると記されている。とすると、ヴェルヌがそうした著書から伝承を知っていたこともありうるが、まずは『アラビアンナイト』からということが自然であろう。

では、春浪のばあいはどうであろうか。春浪は純粋に『アラビアンナイト』の翻案として書いたのであろうか？ わたしはここにヴェルヌのテキストが介入していると推定している。というのは、春浪は〈磁石山〉がある島を「地の極」といつている。また、『アラビアンナイト』にある黄銅の騎士像が「白衣を纏い」としている。これは『アラビアンナイト』のどの版にもない形容であるが、ヴェルヌの『氷のスフィンクス』を春浪が連想していたとすれば、それほどふしぎではない。さらに、春浪が読んだ可能性がある『氷のスフィンクス』のサン普森・ロウ社刊の英訳

本のタイトルは『南極の秘密 (An Antarctic Mystery)』（一八九八）となっているが、これは春浪の「地球の極の魔山」に対応している。こうしたことから、わたしは、春浪の物語は『アラビアンナイト』と『氷のスフィンクス』のアマルガムであろうと思っている。

以上の例からもわかるとおり、ヴェルヌの海洋冒険譚は、古代からの伝承からもインスピレーションをえて書かれ、それを科学的な想像力によつて現実的・科学的な物語に転換して、創造されているのである。ヴェルヌの世界は、いわば人間の深層にある原型的なイマジネーションの創造的なくり返しであり、だからこそ限りない興行きをもっているといえよう。その意味では、ネモ船長も近代によみがえった旧約聖書のヨナやホメロスのオデュッセイアにほかならないのではないか。（本論は、思文閣で刊行予定の論集『起源と差異としての翻訳』において執筆した「魔術的ファンタジーとSFの交叉点——春浪・『アラビアンナイト』・ヴェルヌ』の一部と同じ趣旨であるが、この論集の刊行が大幅に遅れていることもあって、本誌でも取りあげたことを附記しておく。）

Les épisodes fantômes de Vingt mille lieues sous les mers

## 『海底二万里』における幻のエピソード

ウィリアム・ブッチャー

石橋正孝／訳

William Butcher

世界で一番翻訳された作家はフランス国籍であるにもかかわらず、その母国は彼の作品中にほとんど姿を見せていない。ジュール・ヴェルヌ作品の中心にあるこの驚くべき不在、この非「地」〔フランス語の *terre* は免〕、「この言い落としは、大学研究者たちの目に留まらずにきたが※、グローバル化する世紀にあつて、フランスの文化とその国民性のイメージに少なからぬ影響を及ぼしている。

※一九九九年に東京大学教養学部に提出した修士論文「地理学と近代西欧の視線——ジュール・ヴェルヌの《驚異の旅》において、訳者はこの問題をすでに論じている。

行間を読んでいけば、もう少し事態が明らかになる。フランス本土を見ずに横断する『八十日間世界一周』から、フランスを見ずに迂回する『海底二万里』に至るまで、ヴェルヌの描くフランスは、あらゆるところに遍在しているがどこにも存在していない。

もうひとつの事実上の処女地たる草稿〔1〕におけるヴェルヌはもつと「率直」である。とはいえ、この重ね書きを読んだ人は世

界中にほとんどいないのだから、ヴェルヌによるフランスは永遠に埋もれたままになるしかないのだろうか？

ヴェルヌの中心にあるフランスの不在を論じるには、本がまるごと一冊必要になるだろう。ここでは、模範的な事例である『海底二万里』のケースを取り上げることにするが、中でも特に草稿およびこの傑作をしめくくる数章に注目する。これらの章は——たぶん——フランスとイギリスの間のどこかで展開しているのだ。

世界中でもつとも読まれている小説家の一番人気のある小説のことは誰もが知っている。ところが、実をいえば、この作家が彼にふさわしい地位を得つつあるこの時代にあつてなお、『海底二万里』の多くの側面がまだ論じられないままになっている。

この小説の終わり、ネモ船長のナウティルス号は英仏海峡に接近するが、それは一瞬の出来事であつて、「われわれは英仏海峡の入口を通過した」(第二部第二十二章〔以下、『海底二万里』からの引用は、原則として岩波少年文庫の私市保〕)と特定されているだけである。ヴェルヌが次々に所

着を考えれば、こうした言及は驚くべきものではない。だが、別の観点からいえば、これは例外的であって、というのも、ジュール・ヴェルヌには、彼の小説の中でフランスを描く権利がなかったからである。物語の草稿ヴァージョンにおいては、しかしながら、ナウティルス号が英仏海峡を横断する場面が幾らか存在する。執筆のこの段階においては、ヴェルヌはフランスの沿岸を提示し、ネモとその船客アロナックスに、シエルブルー、ル・アーヴル、カレーの沖合を通過させたがっていたのだ。しかし、この地域を愛している者たちにとっては残念なことに、これらのシーンを讀んだことのある者はひとりもない。『海底二万里』の最終ヴァージョンからは抹消された、フランスに関わる五つのエピソードは、本稿が初公開となる。そこで描かれるのは以下の通りである。英仏海峡の海底を訪れるネモとアロナックス、ル・アーヴルの近くにある断崖の影を見たアロナックスが作り上げる中世的なヴィジョン、貴重な地理学的情報を与えてくれる短い条りが二つあり、対して三つ目の断章は、カレー沖の、幸福感に満ちた曙と陽光に照らされた平穩の「光景」を描いている。

しかし、順番に話を進めよう。私はまず〈驚異の旅〉に登場するフランスを「俯瞰し」、『海底二万里』刊行ヴァージョンの第十二章および第二十三章を検討した後、同じ章の草稿ヴァージョンを組上に上げる。最後に、『海底二万里』の注釈となっている素晴らしい短篇小説についていささか余談に渡る。死後発表の謎めいた傑作「エドム」〔掲載誌の編集長の判断で「永遠のアダム」に改題された〕の「こと」である。この作品では、二万年後に残存するとされる唯一の文明——中国

文明——は、フランス語を復活させるのだ。

ヴェルヌ作品におけるフランスの不在は、博士論文の格好のテーマとなるだろう。なぜなら、それはひとつの空虚なまとまりをなしているからである。ヴェルヌの生前に刊行された小説のうち、フランス本土を舞台とする作品はひとつもない。数少ない例外として、『ペガンの五億フラン』（一八七九年）の第二章があるが、周知のように〔本誌前号の「特集を参照」〕、元になった原稿を書いたのはヴェルヌではない〔2〕。一八八六年に編集者ジュール・エツヴェルが死んだ後、小説家はそれまでより自由になったと感じていたに違いない。『クローヴィス・ダルダントール』（一八九六年）の最初の四章はフランスを舞台としている。そして、『海の侵入』（一九〇五年）の舞台は、フランス領チュニジアである※。それに対

〔1〕 死後刊行小説の草稿は、ピエロ・ゴンドロ・デラ・リーヴァが複数の論文で研究しており、ジュール・ヴェルヌ協会のお陰で刊行されている。また、『ジュール・ヴェルヌ協会会報』には、複数の短篇小説の草稿ヴァージョンが掲載されている。しかし、マルセル・デトンブヤフォルカー・デリスによる研究、さらには、『作家ジュール・ヴェルヌ』（二〇〇〇年）に収録された論文といった幾つかの先駆的な研究を除いて、私の知る限り、二〇〇五年現在、死後刊行ではない小説の草稿の全体に目を通した人は少ない。

〔2〕 Simone VERNE, « L'authenticité de quelques œuvres de Jules Verne », *Annuaire de Bretagne*, tome LXXIII, n° 3, 1966, pp. 445-458; Yves CHERREL, « Questions de méthodes et d'idéologies chez Verne et Zola », in Jules Verne 2 : *l'écriture verrienne*, édité par François RAMOND, *Revue des lettres modernes*, 1978, pp. 69-96.

して、かなりの数の短篇小説がフランス近辺を探索している。例えば、ピレネー山脈を舞台とする「サン・カルロス」（一八五五年〜一八六〇年頃に執筆）、物語の一部がブルターニュ地方で起る「フランスへの道」〔通常は長篇に分〕、死後刊行の短篇集『昨日と明日』の数篇、そして、『オクス博士』に収録された全短篇、すなわち、「空中の悲劇」、「オクス博士」、「ザカリウス親方」、そして「氷の冬ごもり」である。

※ほかにも、事実上アンドレ・ローリーの単独作である『シンシア号の漂着物』をはじめ、『征服者ロビュール』、『アンティフェール大将のかくも素晴らしき冒険』、『ジャン・マリ・カビドゥランの物語』、『第二の祖国』、『素晴らしきオリノコ川』、『ヴィルヘルム・シュートリッツの秘密』にフランスは一瞬登場する。

『八十日間世界一周』でモン・スニに向かう途中のフォッグとパスパルトゥはフランスを横断せざるをえなかつたはずだと反論されるかもしれない。確かに、フランス人従者を連れてロンドンからスエズに向かう際に、フランス本土を（そして名高き海峡を）横断せずには考えにくい。考えにくいことは確かだが、まったく不可能というわけではない。ヴェルヌはシドナムから先の話は先回りし、スエズから今度はフラッシュバックに転じるのであつて、フォッグのメモを介したこのフラッシュバックは、第二のフラッシュバック〔小説最後のフラッシュ〕の内部に位置づけられている。そして、著者は、第二のフラッシュバックはしめくくっているものの、第一のそれは開いたままにしている。ものの見事に、中国的に、といいたくなる手際で円環が閉ざされたために、

私の知る限り、『八十日間』の中心のこのフランスという穴が指摘されたことはこれまでに一度もなかつたほどである！

消滅の法則があればこそその例外は、いうまでもなく、『二十世紀のパリ』であつて、この作品において読者は一度としてフランスの首都を離れることがない。だが、この魅力的な小説がエツツエルによつて乱暴な言葉遣いで拒絶されたことは知られている通りである<sup>(3)</sup>。しかしながら、パリおよびフランスに関するヴェルヌのヴィジョンは、予言的というのとは違う意味において、先見の明を感じさせる。

また、『イギリスとスコットランドへの旅』の最初の十三章がフランスで展開する。この本の中で、ヴェルヌは、生まれて初めて湖を、山を眼にする。フランスではなく、彼が初めて訪れた外国、スコットランドで。今回もまた、エツツエルは首を縦に振らず<sup>(4)</sup>、今回もまた、われわれは、ヴェルヌが母国について考えていたことを理解する上で貴重な資料を得られたわけである。

われわれが「エツツエル化」された『海底二万里』のヴァージョンの方を向いている限り、フランスは依然として巨大な不在のままである。アロナックスがエイブラハム・リンカーン号に乗り組んだ時、フランスに向かうという思惑を持っていたのは確かである。ネモが「フランスの百億フランの国債」（第一部第十三章）（初版では「百二十億フラン」）に言及しさえするのをもまた事実である。マルキーズ諸島が「フランス国旗にまもられたその魅力的な島々」（第一部第十八章）として紹介されるのもその通りである。もつとも、気の毒なアロナックス教授はそれをほとんど目に

することはないのだが。同様に、善良なる博士が「フランスが保護領としたガンビエ諸島」(第一部第十九章)を見ることはなかった。なるほど、小説の中でフランス本土は何度も言及されているが、決して目に入ることはなく、まるで実現不可能な夢であるかのごとく、常に過去か遙かな未来に位置づけられているのだ。地中海を横断する時ですら、フランスは避けられている。アロナックスが不安を覚えながらこう自問しているにもかかわらず。

「ネモは」私にフランス沿岸を見せてくれるのだろうか？」

ここで、ナウティルス号の航路がわれわれの知らぬ間にフランスの沿岸に近づいていないかどうか、確かめてみよう。地中海横断に際し、フランス原産の魚が数百種類挙げられるリストをわれわれは読むものの、潜水艦は、シチリア島からジブラルタルまで、多かれ少なかれ真つ直ぐ進んでおり、したがって、フランスに近づくことはない。「北緯四十七度二十四分、西経十七度二十八分」と題された第二部第二十章の方が例としてより適切である。ナウティルス号は、大西洋横断ケールを、「アイルランドから百五十キロ」の地点まで辿り、そこで「クレア岬とファストネット岩礁の灯台」を目にする。「五月三十日、ランス・エンドを目にしなから、イギリスの最南端と右舷にのぞむシリー諸島のあいだをすすんでいた」。最後に、「五月三十一日」〔原文は〕の正午に、この章のタイトルに示されている地点でヴァンジュール号の残骸を発見する。その後、国籍不明の船が潜水艦を攻撃してくる。潜水艦は速度を時速十八から十九マイルに保ったまま、「六月二日」の六時まで、船を「東に向かつて」おびき寄せ、同じ日の午前「五時」

〔原文〕に、これを沈める。それから、「この惨劇の場所から、海面下百ビエほどの水中をおそろしいスピードではなれていった」。「地図にしるされた位置を見ると、われわれが英仏海峡の入口を通過し、猛烈なスピードで北氷洋のほうにはこぼれているのがわかった」。「夕方には、われわれは大西洋を二百里も走りきっていた」。最終的に、「十五日から二十日のあいだ」、ナウティルス号は「向こう見ずな航海」を続け、「フェロー諸島とロフォーテン諸島のあいだ」(第二部第二十二章)でマエルストロームに達する。

いうまでもなく、地理学上の曖昧さは、アロナックスの五里霧中とネモの惑乱を示し、巨大な渦潮への落下という驚きのクライマックスを準備するために、維持されている。しかし、平均的な読者にとつては思わせぶりにすぎないエピソードである最後の攻撃

[3] Cf. Olivier Dumas, *Piero GONDOLIO DELLA RIVA et Volker DHS (éd.), Cortes-pondance théâtre de Jules Verne et de Pierre-Jules Hetzel (1863-1886), tome 1, Slakine, 2001, pp. 25-27.*

[4] あるいは、ヴェルヌの生前にこの作品が刊行されなかったことを考慮すれば、われわれは少なくともそのように想定すべきである。ジル・ド・ロビアン(二〇〇〇年刊行の『ジュール・ヴェルヌ』を除き、どの伝記作者も、この作品がなぜ未刊行のままになったのか、その理由を説明しようとなし)。ロビアンは、ヴェルヌが自作を「刊行しようと思わなかった」と書いているが、その根拠を示していない※。

※フオルカー・デースが指摘するように、『イギリスとスコットランドへの旅』の草稿には、エツツェルの筆跡で刊行した場合の巻数とヴェルヌの住所が書き込まれており、エツツェルが刊行を検討したものの、最終的に拒否したのはほぼ明らかである。

が投げかける大きな謎のひとつは、ネモが憎んでいるのはどの国なのか、ということである。沈められた船はたぶんイギリス国籍だが、フランス国籍かもしれない、ただ強調しておかなければならないのは、本のほかの箇所では、ネモはポーランド人であると仄めかされており、その場合には、彼の敵は必然的にロシアということになる。ネモの国籍を特定するのは難しい。『神秘の島』において、ヴェルヌは、船長は結局のところインド人だと主張するのだが、この国籍は、『海底二万里』においては説得力がない。ここではこの二つの問題にこれ以上は深入りしないが、編集者エツツェルのごり押しの結果、ヴェルヌはネモの国籍を変えざるをえなかった。編集者宛の手紙によれば、ヴェルヌの最終的な意図は、特定可能な国籍はすべて避けるというものであった<sup>(6)</sup>。そうすることで、彼の名前と潜水艦のように、船長は無国籍に、したがって、普遍的な存在となる。船長がイギリス国籍かフランス国籍の船だけを付け狙っているという仮説は、そういうわけで……お流れとなる<sup>(7)</sup>。

ネモの行動をもっとよく理解したいと思うのであれば、スコットランドに対する暗示を秘めている彼の名前にむしろ注目すべきである。この呼び名の起源は、事実として、エディンバラとスコットランドの紋章にあるのだ。[*Nemo me laessit impune*]（私を襲撃してただですむ者はいない）。この表現は、ネモの人生一般を、そして、様々な船舶によるいわれのない攻撃に対する彼の態度を説明している。それは、攻撃してきたパプア・ニューギニア人をネモが電撃で罰する場面ではほとんどそのまま引用されてい

る（第一部第二十二章）。これが出典であるというさらなる根拠はヴェルヌ自身が提供している。『イギリスとスコットランドへの旅』の最初の頁で、著者はこの未知の国の主たるガイド役となつたのが「ルイ・エノー氏」であったと述べている。さて、このエノーは、『イギリス、スコットランド、アイルランド』（一八五九年）と題された本を書いており、その中で、[*Nemo me laessit impune*]をスコットランド人の性格の基礎をなすものとして引用している（八七頁）。結局のところ、船長が攻撃するのは攻撃を仕掛けてきた者たちなのであって、彼は、「目には目を」の法を信奉しているのだ。しばしばそうであるように、ヴェルヌは自らの情報源をわかりやすい形で引用しているのである。

航路の細部に話を戻せば、疑問はまだ残っている。アイルランドとイギリスの近くを通る理由、ランズ・エンド岬に到着するまでの航路、そして船を沈没させた後の航路。ところで、この沈没は沖合、ヴァンジュール号から三百五十マイル弱（時速十八ノットで十八時間）離れた地点、ということは、フィニステール県から西に三百五十マイル以上離れた地点での出来事である。「英仏海峡の入口」とか「大西洋」とか「北氷洋のほうに」といった曖昧な文言を見る限り、船を沈めた後、ネモがイギリスの西を通り、英仏海峡にはまったく入らなかつた可能性も排除できない。同様に、五月三十日以前に、潜水艦がアイルランドの海域に入つていた可能性もある<sup>(8)</sup>。こうした疑問のすべてに対する答えは、ヴェルヌがスコットランドに寄せる愛着に求められる。母方の祖先がスコットランド系であると信じていた小説家は<sup>(9)</sup>、彼の「第

二の祖国」を視界から外すことは滅多になく、『地球の中心への旅』においてすら、そうなのだ！ したがって、ナウティルス号が鍾愛の地たるカレドニア海域で時を過ごしていたということはありうる。

こうした言外の可能性は、ヴェルヌがこの海域を何度も航海し、よく知っていただけに、むしろ飽き足りない思いをわれわれに抱かせる。事実、一八六八年八月十九日、ヴェルヌはエッツェルに宛ててこう書いている。「グレーヴSEND前に停泊中です……そして、『海底二万里』第一巻を書き終えました」。同様に、おそろく同じ年のある「火曜日」のこと、父宛の手紙にこうある。「デイエップからこの手紙を書いています……まるでル・クロトワ〔の自宅〕ににいるかのようには仕事をしています」。ヴェルヌは、想像の中で世界一周して自宅に戻るのだが、逆説的なことに、彼が自らの傑作を書いていたまさにその海域に地理学的空白を作り上げていたのだ！

いうまでもなく、部分的な痕跡は残っている。ヴェルヌは、フオークランド諸島とサン・マロのつながりを説明する。彼はまた、同じ町の教会にあった一枚の絵、「大きな船が、タコの足で波の下に引きずりこまれる」ところを描いた絵を紹介している。この絵それ自体は失われているものの、問題の教会は聖トマス教会であるとしば既定されており、このことから、大ダゴの登場する有名なシーンのネタ元のひとつは、ピエール・ドゥニス・ド・モンフォールの『軟体類の一般のおよび個別の自然史』であると思われる。ヴァイクトル・ユゴーも『海で働く人々』を執筆する際

に利用したこの本には、失われた絵の描写が見出されるのである。さらに、書簡を読めば、エッツェルの要求によって、しばしばあらゆる論理に反した形で変更が加えられている事実も明らかになる。一例として、一八六九年四月二十五日になされた、際立つてバカバカしい提案を挙げよう。「中国の海賊船にさらわれた中国の子供たちを救助する。彼らは危険ではない——愉快な連中で、

[5] 「ですが、ポーランド人とロシアは止めましょう。読者はそれぞれの気質にに応じて好きなように想像すればよいのです」(一八六九年六月十一日「？」付書簡、前掲往復書簡集の一三三頁)。以下も参照。「漠然としたままにしておきましょう、それでなんとかなるはずですよ」(一八六九年五月十五日付書簡、前掲書一〇五頁)。

[6] ただ、草稿では攻撃された船舶が「ソルフェリーノ型」とされている。ところで、ルイ・フィギエによれば、『科学の驚異』第三巻、一八七〇年版ガリカ)、「ソルフェリーノ型」とは、フランス軍艦の弩級のことである。

[7] ヴェルヌ自身が書いた旅の地図が英仏海峡を通過して北海に抜ける航路を指示していることは事実だが(第二部第七章)、この地図は信用できない。というのも、ネモの常軌を逸した迷走も、シリー諸島通過も記されていないからである。したがって、詳細な航路を示すものとして、これを挙げることはできない。

[8] 以下を参照のこと。Marie-Thérèse de Lassez, « L'origine des Alloué de la Fuyé », *Bulletin de la Société Jules Verne*, n° 11, 1969, pp. 55-56; Christian Roain, « Postface », in *Voyage à travers*, 1989, pp. 241-245 (243)。二番目の文献でロバンは「家族の集まりにおいて、ジュール・ヴェルヌの父方の「原文ママ」大伯父ブリューダン・アロット・ド・ラ・フュイは、祖先のアロットがスコットランドから来たという話を好んだものだった……」と書いている。

ボートで祖国に帰らせてやるのだが、彼らはなにがなにやらさっぱりわかっていない。ネモはなんら心配する必要がない。一人くらい艦内に残しておいてもいいだろう。誰も彼がなにをいつているのかわからず、彼の方でもちんぷんかんぷん、ナウティルス号の雰囲気を知る。しかし、これは君の仕事だ。編集者のこうした介入には開いた口がふさがらず、この小説の深刻さが彼にはまったく理解できていないことがわかる。デイズニー・ランドでもあるまいに、ナウティルス号の雰囲気を「明るく」しようというこの奇天烈なアイデアをヴェルヌが取り合わなかったのは幸いだった。

一八六九年四月二十九日付書簡において、ヴェルヌは、編集者が出した別の場違いなアイデアがいかにお話にならないものであるか、明確に示している。「湾の」底にナウティルス号が追いつめられ、進路を塞いでいる船を沈めるしか脱出する方法がないことにしたらどうかというあなたのお考え」について、その現実性をひとつひとつ破壊していく。それゆえ、ネモがフランス沿岸から逃げ出したのは、エッツェルのこのバカげた提案のせいだったかもしれない。あたかも編集者の悪夢が小説家と主人公を海の中にまで追いかけてきたかのように。おまけに、同年五月十五日、ヴェルヌはル・クロトワから次のように書き送っている。「賛成です。カレー、ブローニユ、ドゥヴァーの間の英仏海峡を通過する旅の最後は、パリの金融取引場広場そのものです。書き直さなければなりません。どこにいいのかわからないようにしなければなりません」。要するに、当初の段階では、英仏海峡の描写

はもつと完全なものだったのは明らかだ。

幸い、草稿は、小説家の最初の意図を窺わせるには十分な情報を含んでいる。そういうわけで、先に引用した「猛烈なスピードで」云々という文章の後に、刊行されたヴァージョンからは消されてしまった一節が見出される。それを以下に再録する（ゴシック体になっている箇所は、草稿で抹消されている部分であり、□内の箇所は刊行ヴァージョンにはない部分である※）。

※以下、草稿からの引用の邦訳は、不明箇所について、オックスフォード・ワールドズ・クラシックスに取められた『海底二万里』の注釈におけるプッチャー自身による英訳の解釈に基づいているが、その妥当性は必ずしも確かではなく、転記に誤りが含まれている可能性もある。MS1はいわゆる下書で、部分的に欠落している。MS2は印刷所に入稿された清書原稿。いずれもフランス国立図書館に所蔵。

……われわれが英仏海峡に入ったことがわかり、私は安心せずにはいられなかった。月がこの位相にある時には、潮汐が岩礁を露わにしていた。ウエサン島とランス・エンド岬の間では、潮流は通常であれば秒速七十五センチなのだが、二メートル五十に達するはずで、われわれはさらなる速度で運ばれていった。

英仏海峡の底は、平均して百七十メートルの深さがある。かなり平坦になっており、イギリスとフランスの間に掘られた砂がちの谷間をなしていた。ナウティルス号はその日の間ずっとアルモリカ〔アルターニユ〕の岸辺の近くを航行していた（<sup>29</sup>）。（MS2 feuille 127）

ヴェルヌは、二つの国を隔てる——あるいは、結びつける——「谷間」を簡潔に描き、この地方の地理的状況に精通していることを披露し、故郷であるブルターニュの近くをナウティルス号に通過させる喜びに逆らえなかったのだ。この直後には、次のような文章が読まれる。

夕方には、われわれは、英仏海峡のうち、ブレストとセーヌ川の河口の間に含まれる部分を通過していた。時計の針が八―七時を指していた頃、ラ・エーヴ岬の灯台が電光を送つてよこした。その時、私は、アンティフェール岬の素晴らしい断崖絶壁を認めた。それは、夜が訪れる中、幻想的な外観を呈しているのだった。草に少しずつ削られた白亜の広がり、が奇怪な人物像の、延々と続く行列を表しているのだった。チマブーエ〔一二四〇―一三〇二年、イタリアの画家で、ジョットの師とされる〕やマンテーニャ〔一四三二―一四九一年、イタリアの画家〕といった、いにしえの画家たちの無造作なやり方で配置された中世の女王たち〔11〕、甲冑に身を固めた君主たちを祝福する、丈の高いミトラ帽を被つた司教たち、長い頭巾を被り、ゆつたりした鬘のドレスを身にまとつた貴婦人たち、宴会の大テーブルの後ろに立つ小姓たち、それから、櫓や石落としを備えた城塞があつたが、大聖堂の浅浮き彫りのように、小さすぎて遠近法にうまく収まっていなかつた〔12〕。

次いで真つ暗になり、幻影は「夜の霧の中に消えた」。  
(MS2 127)

この重要な一節の中に、われわれは、典型的なヴェルヌの特徴を認める。最新設備を備えた灯台、自然美に対する感受性、将来書かれる小説『アンティフェール大將のかくも素晴らしき冒険』(一八九四年)への暗示となつている、ル・アーヴルの近くの岬の名前であるアンティフェール。奥行き消滅に関する指摘は、小説全体を照射している。スナイフェトルの頂上からアイスランドを俯瞰するアクセルのことがただちに思い出されることだろう。《驚異の旅》に登場するすべての火山がそうであるように、この山それ自体もまた、エディンバラでヴェルヌが初めて見た山であるアーサーズ・シートに由来している(『イギリスとスコットランドへの旅』第二十章)。アロナックスが初めて潜水艦の内部を訪れた際に目にした十二枚ほどの絵が示すように、絵画芸術は、『海底二万里』において重要な位置を占めている。そうして挙げられる画家の中には、海景で知られるジョーゼフ・ヴェルネも含まれている。引用した一節は、その画趣にもかかわらず、艦内の

[9] MS2:「それでは私はナウティルス号の進路に確信が持てた」。

[10] MS2:「英仏海峡の深さは百から百十メートルあって、ナウティルス号はそれ以上深く潜航できず、「×××」のように中間に留まり、時折海面に浮上したが、その時目にしていったフランスの沿岸の近くに際立って寄つていたわけではもはやなかつた」。

[11] MS2:「それから、まさにパオロ・ヴェロネーゼの描く羊飼いたち、ゆつたりした衣装を着た「×××」、シャルルマーニュの「×××」」

[12] MS2はさらにこう続けている。「そうだ、私はそれらがよみがえるのを見た」。

陰鬱な雰囲気とも、アロナックスの貧弱な想像力とも合致しておらず、そのために削除されたのであろう。

他方で、刊行ヴァージョンにおける「向こう見ずな航海」は、草稿ではたったの一文ですまされている。「真夜中頃、われわれは、ソム川の河口を通り過ぎたが、一万ヘクターも広がるその砂が上げ潮に覆われていた」(MS2128)。

ヴェルヌが居住していたル・クロトワは、まさにこの湾に面していた。おまけに、書簡でヴェルヌはしばしば自らを「ソムの動物(animaux)にかけた言葉遊び」と称している。

削除された四番目の断章は、山岳に関わる情報を含んでいる。

「ネッド・ランドが私が目覚めるのを待っていた……」

「逃げようじゃないか……」

「機会を生かさなければ」

「用意はいいかね、先生？」

「大丈夫だ。でもここはどこだろう」

「ドーヴァー海峡は通過したぜ。グレート・ヤーマスとノース・フォアランドの明かりが見えた。一刻も無駄にはできない！どこに連れて行かれるか、わかったもんじゃない」

(MS2128)

潜水艦の航路を知るためには不可欠な一節である。ノース・フォアランドは、ケント州の岬である。グレート・ヤーマスは、ノーフォーク州の岬であって、ケント州の北に位置する。

最後の断章は、草稿の欄外に書かれており、ひよっとすると一番重要な個所なのであるが、美しい海景が読まれる。

「ナウティルス号は右舷の陸地から数マイル離れたところに浮かんでいた<sup>[13]</sup>。暑い一日になりそうだった<sup>[14]</sup>。空は白く、大気は穏やかだった。風がそよとも吹かない。海面には、規則正しい細かい皺が交錯する菱形を描いていた。海水は、液化したエメラルドのようで、ゆったりしたうねりに膨れ上がっていたが、ナウティルス号はほとんど影響を受けていなかった<sup>[15]</sup>。遠くの方に、漁船が何隻か、そして、帆をだらりと垂らした沿岸航行用帆船が二、三隻、脈打つ霧の中にござちやござちやと溶け込んでいた。蒸気船の煙が空に動かない雲を引いていた。

天候はわれわれに味方しそうであった。ナウティルス号は北を指し、陸地に沿って進んでいた。残念ながらスピードが出すぎていた。カチガットカスンド(カチガットカスンド)の狭い水路を探すつもりだろうか？ 出口のないバルト海に入り込むつもりなのだろうか？ 私にはわからなかった。むしろルウエーの西海岸を北上するのではないかと私には想像された<sup>[16]</sup>。

ネッド・ランドのいう通りだった。一日、一時間たりとも無駄にはできない」(MS2128-129)。

この特筆すべきシーンは、草稿では抹消されておらず、したが

つて、校正段階で削除されたものだが、マエルストロームに消える直前にナウティルス号が味わった最後の幸福な瞬間を喚起する。複数の沿岸航海用帆船の存在、そして、一隻の蒸気船と右舷の陸地は、それがヨーロッパの大陸部分であることを示している。半過去〔過去における〕の使用は、絵画的イメージと相俟って、ヴェルヌがここでもなんらかの絵画作品から着想を得たことを示唆しており、それがどの作品か特定できれば興味深いだろう。「交錯する菱形」はヴェルヌのライトモチーフである。草稿では、リールデンブロックの家の窓は「菱形模様」(□◇)になっていた〔17〕。そして、『イギリスとスコットランドへの旅』におけるリヴァプールの中のドックを舞台とした美しいシーンでは、鉄道が「もつれた紐」を形作る。線条性と網目、官能的な曲線と暴力的な直線、単純な単一性と複雑な複数性、「もつれた紐」と「交錯する菱形」がヴェルヌの世界の核心にある。

以上の断章のすべてにおいて、ヴェルヌは、生まれ故郷であるナント、そして彼を受け入れてくれた町であるアミアンの近くを、自家用ヨットで訪れたブルターニュとノルマンディの沿岸を航行することに喜びを覚えているといえよう。彼の想像力は完全に視覚的であることが明らかになる。と同時に、小説家は、自然の複雑さに魅せられている。『ハテラス船長の航海と冒険』の氷原の幻想的なシーンを一からすべて創り上げたように、彼は、海という、一見して空虚なキャンバスを借りて、その想像力を十全に開花させている。それゆえ、この小説、そして刊行されたヴェルヌの全作品にフランスが不在であること、そして、エツヴェルの圧

力を受けて、ヴェルヌがこれらの美しい断章を削除すべきだと思つたことは惜しまれる。

\* \* \*

私はここで進路を変え、フランスの謎を別の角度から、すなわち、死後刊行短篇「エドム」を通して探索してみたいと思う。死後刊行ということとは物議を醸してきたということであつて、それというのも、一九〇五年のヴェルヌの死後に刊行された小説の主要箇所全体、あるいはそのほとんどの部分がジュールの息子ミシエルによつて書かれたことがわかっているからである〔18〕。だが、「エドム」は依然として謎の存在であつて、なぜなら、事実上、死後出版小説の中では唯一そのオリジナル草稿が刊行されていない

〔13〕 MS1はさらにこう続けている。「それは、オランダの「×××」前の低地から数マイルのところにあつた。オランダは地平線に立ち込める蒸気の中に辛うじて隠されていた」。

〔14〕 MS1はさらにこう続けている。「空はすでに灰色でもなければ、青くもなかった」。

〔15〕 MS1はさらにこう続けている。「……海には少し霧が寄つていた。それは眠らずにいるように見えた」。

〔16〕 MS1:「いうまでもなく「×××」それがノルウェーに沿つて北に進んでいるとは断言できなかった」。

〔17〕 William Burcher, « Long-lost manuscript », *The Modern Language Review*, 93 (4), 1998, pp. 961-971 (966, feuille 4).

〔18〕 Piero Gondolo della Riva, « A propos des œuvres posthumes de Jules Verne », *Europe*, n° 595-596, 1978, pp. 73-88.

作品だからである。ヴェルヌ研究者の大半は、一九一〇年に「永遠のアダム」というタイトルで発表されたこの短篇が、二人の著者（ジュールとミシエ）によって書かれたと信じているが、それぞれの貢献度については議論が続いている※。ヴェルヌのそれ以前の作品のテーマをほぼすべて模倣し、注釈し、パロディ化しているという限りにおいて、「エドム」は、「症例ヴェルヌ」を理解する上で欠かせないテクストである〔19〕。

※残された「オリジナル原稿」は個人が所蔵しているため、実際にそれを見たのはごく少数の研究者だけである。そのうちの一人であるピエロ・ゴンドロ・デラ・リーヴァは、全文がミシエルの筆跡で書かれていたと断言しており、現時点では、この短篇にジュールが関わっていた可能性は低いようである。

物語の一部が二十世紀で起きたことになっているこの素晴らしい短篇小説において、フランスとそれ以外のすべての国々が海底に沈んでしまう。異国に住んでいたフランス人である主人公が、ほかの生き残りの人々と一緒に航海する過程で、祖国の首都を探し求める感動的なシーンがある。それは、絶望的な確認をもってしめくくられる。「ここにパリがあった」。生き残りの者たちは、それでも、アトランティスのあつた地点にわずかな土地を見つけ、そこにコロニーを建設するが、事態の悪化を防ぐには至らない。二万年後、コロニー破綻の物語が、ゾフルという名の学者によって発見される。それを読んだ彼の出した結論は以下の通りであった。二十世紀の文明と同じようにあらゆる文明は滅亡を運命づけられており、人類は、上昇と失墜の無限循環に囚われているので

ある。

この短篇には、一連の明確な指標があつて、そこから導かれる結論は蔑ろにできない。最初のとつかりは、未来文明を担う人種に関するものである。一ダースはある指標が示すように、それは中国人なのだ。これまでのところ、このことを指摘した人は皆無なのだが……〔20〕。

私がここで追求したいと思う手がかりは、英仏関係、特にその言語の問題である。コロニー構成員の多くはアングロサクソン系なのだから、この新世界のリング・フランカは英語ではないかと思われる。ところが、彼らの子孫は言語の名残をことごとく喪失してしまう。ゾフルまで伝えられたのは二、三の言葉だけだった。然るに、学者が見つけた墓の彼方からの手記はフランス語で書かれていたのであつて、この言葉は生き永らえたのである。われわれの将来は英語圏に覆い尽くされるというこの短篇の表明する不安の念は、英語が消滅するという明示されざる結論に反駁されているのだ。フランス語が衰退するのではないかという不安が一九〇五年のものなのか、一九一〇年のものなのかはともかく、それは逆転されている。逆説的にも、生き残るのはフランス語なのだ。

\* \* \*

英仏海峡の底および内部にいるネモの姿を提示する断章の削除を精査し、「エドム」におけるフランスを検討した今、ヴェルヌが執拗にフランスから亡命し、自らを無国籍の存在とし、愚劣なアメリカ映画のシナリオライターになるという将来を先取りして

いた理由がよりよく理解できるようになったわけである。

答えの一端は、「未知の世界と既知の世界」を探索するという全作品の意図に求められる。探検小説はテラ・コグニタを舞台とすることはできず、地理学小説は異国で展開しなければならぬ。

この謎を解く別の鍵は、『二十世紀のパリ』および『イギリスとスコットランドへの旅』に対するエツツェルの反応に求められる。人は傷つくと、古傷をえぐるうとはせず、もつとも愛するものから距離を置こうとする。刊行年より後の時代に物語が位置づけられているという意味における未来予想小説は、エツツェル生前には〈驚異の旅〉から締め出される※。『二十世紀のパリ』で言及されるフランス作家、特にエツツェルが刊行していた作家を含むリストは編集者の手厳しい批判を受けた<sup>[21]</sup>。『海底二万里』における、様々なジャンルに属する芸術家のリストは、こうした不手際を繰り返すまいとしているかのようである。というのは、そこでは、フランスの作家はその不在によって目を引くからだ<sup>[22]</sup>。フランスに関する限り、ヴェルヌはこう自分に言い聞かせたかのようである。わが祖国について好きなように書けないのだから、小説作品からはフランスが一切姿を消すようにしよう、と。『海底二万里』を書く直前に、三巻からなる『フランス地理』を書いていただけに、なおさら。

※とはいえず、『エクトール・セルヴァダック』および『征服者ロベール』はそうした意味における未来予想小説である。

いうまでもなく、ヴェルヌ作品にフランスのほかの側面は現れている。フランス人登場人物、とりわけ一人称の話者が何人か登

場している。彼らがフランス語で書いている以上、当然のこととはいえ、まさに話者であるというその理由から、彼らは脇役に回らざるをえず、物語にあまり関与できない。

別の次元では、ヴェルヌがフランスの政治にコメントすることができなかったのは明白である。顕著な事例をひとつだけ挙げれば、フランスに大きな損害をもたらした普仏戦争——この戦争の際にヴェルヌは沿岸警備をしていたのであるが——がヴェルヌ作品で言及されることはほとんどない！ ナポレオン一世も姿を見せず、ナポレオン三世も同様である。ヴェルヌが「小皇帝」の治世に執筆していたことを知るためには、『地球の中心への旅』の最後から二番目の章〔実際には最終章〕における帝国運送の郵便旅客船へのさりげない言及を探すくらいしかない。同様に、『海底二万里』では、第一章からヴェルヌは、とりわけその大勢順応的で「付和雷同的な」意見を理由に新聞を嘲笑しているのだが、草稿のみ、問題の新聞がフランスのそれであることが特定されている（この場合には「ル・フィガロ」紙〔現行ヴァージョンでは「手きびる諷刺新聞」である〕）。さらに、小説の冒頭で「怪物」に攻撃され

[19] 『海底二万里』との関連性はとりわけ著しい。

[20] 以下を参照。William Burcher, «Mysterious masterpiece», in Jules Verne: Narratives of Modernity, Liverpool University Press, 2000, pp. 142-157.

[21] 前掲往復書簡集二五—二七頁（一八六三年末か一八六四年初頭のエツツェル書簡）。

[22] せいぜいエツツェルが刊行している作家が言及される程度である。ユゴー、サンド、そしてミシュレ。

た船のひとつは、フランス汽船会社のラファイエット号〔同ジューリオール大洋汽船の（モラ）だったのである。だが、同時代のフランスの現実へのこの二つの言及は草稿にしかない。

（驚異の旅）、その中でもとりわけ『海底二万里』および「エドム」からフランスが徹底して排除されている事実を鑑みて、われわれはフロイトに做って問題のトピックが本質的に重要であると結論づけることができる。しかし、細部に立ち入ろうとすると、証拠が不足しているために躓いてしまう。英語で書かれたヴェルヌ論『予言者の仮面』（一九九〇年）の中で、アンドルー・マーティンは、（驚異の旅）全体がナポレオンへの郷愁に取り憑かれていてという仮説に立つて議論を展開した。だが、マーティンの議論は脆弱であって、私にはほとんど納得できなかった。フランスの消滅のアナロジーとしてもつとふさわしいのは、『ジャンセラール号』（一八七五年）を筆頭とする三つのヴェルヌ小説〔ほかの二つは『地球の中心（への旅）』と『スクリュー島』〕における過去形の消滅であろう。この排除は意図的なものなのか、そうではないのか？ 証拠（または校正刷り）の不在ゆえに、その点は不明である。それゆえ、ヴェルヌの母国の反映が彼の無意識のどの層で煌めいているか、それを知ることのできる者はいない。

『海底二万里』の削除された断章の重要性を評価することで、われわれはもつと確実な足場を得ることができる。この第三千年紀の初めにあって世界市民たるわれわれにとって、この発見の帰結は二つの領域に及ぶ。

第一の領域はテクストの次元である。『海底二万里』の厳密な

本文を確定し、参照に耐える版を用意することは緊急の課題である。現行の版はどれもあからさまなフランス語の間違いを含んでいる〔23〕。ヴェルヌが十九世紀の出版からひどい扱いを受けたからといって、現在も同じ目に遭わせる理由にはならない。第二に、『海底二万里』の注釈版によって、われわれのテクスト理解が深められるということである。最低限、固有名と刊行されたテクストの不明な個所の説明が求められる。第三に、草稿を刊行しなければならぬ。これは、今日では、まったくもってマイナーな作家についても行われていることだ。世界的名声を有する唯一のフランス作家に対してなされてはいけないという理由はない。私の四番目の結論は、むしろ問いかけである。エッツェルの圧力によって削除された個所を復元した形でヴェルヌの小説を改訂すべきだろうか？ 下書きの美学的価値および削除における編集者の役割をどう評価するかによって、答えは変わるだろう。私自身の意見は、草稿のもたらす知見に照らして、われわれの知る『海底二万里』の何箇所かは改訂する必要があるというものである。だが、われわれの答えがどのようなものであるにせよ、検閲を受けた（この言葉を使ってしまう）三つの美しい断章をわれわれの脳裏から消すことはもはや不可能である。英仏海峡の砂で覆われた海底、ラ・エーヴ岬の中世的断崖、そして、イギリスとフランスの間どこかで時間の中に宙吊りにされたナウティルス号が完璧な諧調に浸っている光景。これらの場面は、今後は、ネモとその最愛のナウティルス号の集団的イメージの一部をなすことになる。

さらに触れておかなければならない第二の領域は、ヴェルヌの国際的受容である。この作者は、同時代のフランスの社会学的状況、その科学技術の現況を解説することでその作家としてのキャリアを始めたといえよう。しかし、それと同時に彼の中にはより広い地平を求める脱出の夢があつて、それが彼のエクリチュールを部分的に鼓舞していた——そして、エツエルが後押ししたのはこの傾向だけだったのである。ヴェルヌの名声がそれに続いた。小説に登場するテクノロジーも舞台設定もフランスとは関係がないため※、外国人たちはヴェルヌをわがものにして当然だと考えた。特にアメリカ人は、ナウティルス号とその船長を自国の名誉市民と見做し、それらがフランス製だとはほとんど思っていない。その結果、ヴェルヌの物語群は、おぞましい映画ヴァージョンの方がよく知られている——そして、フランスは、テクノロジーの先進国であることを示す機会をまたもや逸してしまつたのだ！

※実際には、テクノロジーに関する限り、ヴェルヌが依拠していたのはフランスの発明であることが多い。

結局のところ、ヴェルヌが思うように自作を発表できなかつたのは残念なことである。彼が考えていたことを知るためには、刊行された小説の草稿の中に探しに行かなければならない。『海底二万里』のそれが典型例であるとすれば、草稿は多くの宝を秘めているのである。

#### ヴェルヌの草稿に関する研究

- [1] William BUTCHER, « Long-lost manuscript », *The Modern Language Review*, 93 (4), 1998, pp. 961-971.
- [2] William BUTCHER, « Mysterious masterpiece », in Jules Verne : *Narratives of Modernity*, Liverpool University Press, 2000, pp. 142-157.
- [3] Daniel COMPIÈRE, « Le jour fantôme », *La Revue des lettres modernes*, série Jules Verne 1, n° 456, 1976, pp. 31-51.
- [4] Volker DEHS, « Les manuscrits des Voyages extraordinaires : répertoire des noms disparus », *Bulletin de la Société Jules Verne [BSJV]*, n° 109, 1994, pp. 20-35.
- [5] Volker DEHS, « Le premier dévouement des Cinq cents millions de la Bégum », *BSJV*, n° 123, 1997, pp. 37-41.
- [6] Marcel DESTOMBES, « Le manuscrit de Vingt mille lieues sous les mers de la Société de Géographie », *BSJV*, n° 35-36, 1975, pp. 59-70.

[23] 『海底二万里』では以下のような間違いが見つかる（括弧内に正しい綴りを注記した）〔本誌第二号掲載のフォルカー・デース「メイビー・ディックと仲間たち」も参照のこと〕。Liarov (Lyakhov), Hadramant (Hadramaut), Kitan (Kilian), Arfaks (Arfak), gymnotes (gymnote), chrystones (chrystones), thèys (Tethys), xantes (xanthes), molbars (Mobila), aulosones (aulostomes), munétophis (munétophis), melanopton (melanopterus), thazards (thazards), spinorhis (spirohis), dauphinles (dauphinelles), caouanes (caouannes), alariés (araliés), Rhodomantes (Rhodymène), pantracines (pentacines), dorrips (dorripes), chrysaotes (Chryssoru), lametosa (lamellos), Cyprea (Cyprea), *Laurentia primigétida* (*Laurentia pinnatifida*), apsihoroides (*Aspihoroides*), phycallines (*Phyllactina*), Phycalts (*Phylactis*).

- [1] Olivier DUMAS, « Hetzel censeur de Verne », in *Un éditeur et son siècle : Pierre Jules Hetzel (1814-1886)*, textes et iconographie réunis et présentés par Christian Robin, ACLI, édition, 1988, pp. 127-136.
- [2] Olivier DUMAS, « Le manuscrit d'Une ville flottante, au destin contrarié », *BSJV*, n° 99, 1991, pp. 36-41.
- [3] Olivier DUMAS, « Le choc de Gallia choque Hetzel », *BSJV*, n° 75, 1985, pp. 220-221.
- [4] Olivier DUMAS, « Le monstre de Cabidoulin en version manuscrite », *BSJV*, n° 121, 1997, pp. 16-20.
- [5] Olivier DUMAS, « Jules Verne retrouvé ou le héros venien trahi par Hetzel », *Modernité de Jules Verne*, Presses Universitaires de France, 1988, pp. 11-20.
- [6] Olivier DUMAS, Piero GONDOLIO DELLA RIVA et Volker DEHS (éd.), *Correspondance inédite de Jules Verne et de Pierre-Jules Hetzel (1863-1886)*, tome I, Slakline, 2001.
- [7] Piero GONDOLIO DELLA RIVA, « A propos des œuvres posthumes de Jules Verne », *Europe*, n° 595-596, 1978, pp. 73-88.
- [8] Jean-H. GURAMONPREZ, « Découverte de *L'Oncle Robinson* », *BSJV*, n° 105, 1993, pp. 9-10.
- [9] Charles-Noël MARTIN, « Recherches sur la nature, les origins et le traitement de la science dans l'œuvre de Jules Verne », thèse de doctorat d'Etat, Sorbonne (Université de Paris 7), 1980.